



令和 6 年度全国学力・学習状況調査結果のお知らせⅡ

今回は、算数の結果について詳しくお知らせします。

【算 数】

算数は全体として全国平均や奈良県の平均と比べて高く、領域別、観点別、出題形式別で見てもすべて全国平均を上回りました。全国的に、「思考・判断・表現」の観点や記述式の問題はやや正答率が下がる傾向にあるものの、全国平均と比べ、9～10 ポイント高くなりました。

文部科学省・国立教育政策研究所が発表した「令和 6 年度全国学力・学習状況調査の概要-2」では、算数に関する結果概要のポイントとして、次の 2 点が指摘されていました。

- A) 図形や速さ、割合等について、「日常生活を絡めながら、活用できる知識・技能」の習得に課題が見られた。
- B) データの活用について、「複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明すること」に課題がある。

上記の傾向と課題は、本校の場合にも当てはまっています。

【日常生活の場面と結び付けて活用できる知識と技能】

概要のポイント A) に 表(2)

該当する設問は、表(2)の 2 問です。いずれも、短答式の解答にもかかわらず、正答率が低くなりました。

設問番号	形式	観点	学習領域	鹿小	全国	全国との差
問題 3(3)	短答式	思考判断表現	図 形	48.9	36.5	+12.4
問題 4(4)	短答式	知識・技能	変化と関係	63.0	54.1	+8.9

また、興味深いのは、児童質問紙調査「算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えていますか」とのクロス集計の結果でした。この質問に否定的な回答をした児童、つまり、算数で学習したことを日常の生活の中で活用できるかあまり考えたことがない児童の正答率が低く、無解答率も高い傾向にあったということです。本校においても、「普段の生活での活用」に関して、「当てはまる」と回答する児童こそ全国平均を上回っていますが、肯定的回答の合計ではむしろ下回りました。あくまでも相関関係で、因果関係あるとまでは言えないかもしれませんが、日常と結び付けて考える習慣の大切さを示唆しています。



【立方体の体積を求める問題】

問題 3(3)は、直径 (22 cm) が分かっているボールがぴったり入る立方体の箱の体積を求める式を答える問題です。授業では、本と壁や柱と扉などで球を挟んで、その幅の長さから球の直径を測定する活動やボールがすっぽり入る箱の辺の長さを調べる学習を 3 年生の 2 学期頃に行っています。一方、立方体の体積は 5 年生の学習内容であることから、既習事項すべてを結び付けて活用し解答するのが難しかったのかもしれませんが、全国傾向では、 22×22 や 3.14 を用いた式を書いて誤答となったケースが比



前号で、お知らせした「生駒市立学校の調査結果について（生駒市教育委員会）」の QR コード画像は印刷不鮮明により読み込めない状態でした。申し訳ありません。裏面の新しいコードをご利用ください。

較的多く、円のイメージに引っ張られて円周率を用いた児童がいた可能性もあります。本校の解答類型でも、誤答の分布は全国と似たような傾向となりました。

〔速さの問題 2つの区間を同じ速さで走ったとき、全体の速さはどうなる？〕

問題4(4)は、速さの問題でした。

家からポストまで分速200m、ポストから図書館まで分速200mで走った場合に、家から図書館まで分速何mになるかを求める問題で、答えは分速200mです。

2つの区間を同じ速さで走れば、全体を通して速さは変わらず、特別な計算をする必要もなく解答ができたはずでした。ところが、分速どうしを足して分速400mとした誤答(全国24.3%)や2区間の道のりの合計1000mと解答する誤り(全国3.1%)が見られました。

先の「結果概要」では、速さなどの意味や表し方について十分理解できていない可能性を指摘し、「日常生活の問題場面に照らし合わせて、求めた速さなど…(略)…の妥当性を判断できる」ように指導を工夫するよう求めています。

日常生活で、小学生が速度を意識し普段の生活と既習事項を結び付けて考えることは、ひょっとするとそれほどないかもしれません。自分の経験では、自動車を運転するようになってようやく速度の感覚が持てるようになりました。自転車で疾走していた小学生時代に、分速〇mとか、時速でならどれくら

いだったか、考えた記憶はありません。けれども、授業中や日常生活において、「自転車で6kmの道のりを30分で走ったから…」とか「あと2kmと書いてあるから歩いて30分ほどで到着するかも」などといった会

話をいしきすることが、日常生活の場面と学習内容を結び付けて考えることきっかけになるのかも知れません。

〔データの活用について〕

B)に該当する設問は、問題5(3)データの活用に関する問題でした(表4参照)。

折れ線グラフから必要な数値を読み取り、条件に当てはまることを記述して解答する問題であるため、全国的に正答率が低くなりました。記述にあたって課された2つの条件をすべて満たさなければ正答とはなりません。

表(4)

設問番号	形式	観点	学習領域	鹿小	全国	全国との差
問題5(3)	記述式	思考判断表現	データの活用	56.5	44.0	+12.5

2つの条件のうちどちら一方だけを記述し誤答となった割合は、21.7(全国24.5)%にも達しました。2つの折れ線グラフから、両者の違い(差)を数値で解答しなくてはならないのに、それぞれの数値を解答してしまう誤答例もありました。これは、昨年度の同様な設問でも、正答率が低くなり同じような誤答傾向になっています。

中学校では、「データを基に『判断した理由』を説明できる」ようになることが「データの活用」領域の目標の一つだと言われています。中学校でその力をつけるためにも、小学校の段階では、グラフが表すデータを言葉と数を使つて的確に表現できるようになってほしい。そのためにも、1つのグラフではなく、複数のグラフを比較して気づいたことを、分かりやすく伝える(伝え合って互いに検討し合う)学習活動が大切です。とはいえ、本校の場合、課題とされるいずれの設問においても、正答率が高い傾向にあり、無解答率も低くなっていました。前述のような課題はあるものの、子どもたちのがんばりや少しずつ力をつけて成果を出していることを喜びたいと思います。

「生駒市立学校の調査結果について(生駒市教育委員会)」

